



「普通に生き」て 「普通に死ぬ」ことが できないなんて、おかしい

私たちがいる「あじさいの家」は、重い障がいのある人が安心して充実した日々を過ごすための場所です。私たちは、利用している人たちを「利用者」ではなく、「なかま」と呼んでいます。それは、障がいのある人は「お世話される側」ではないと考えているからです。

なかまの親たちは「この子より、1日も長く生きなければ」と話します。わが子を亡くす悲しみは計り知れないものです。しかし、障がいのある子の親たちは「先には死ねない」と話します。子は、親の死を経験して自立していくもの。親が先に死んで子に送ってもらおうという、普通のことが選択できない世の中なんて、おかしい。

本来、人は普通に生きて、普通に死ぬことができるはずです。普通に生活を送るのが難しいときのために、「福祉」がある。一人の人を多くの手で支えあうようなネットワークがあれば、親たちは安心して死ぬことができるのでは。すぐにはできないかもしれませんが、実現のため、立ち止まらずに、前へもがいていきたい。

いなべ市山郷重度障害者
生活支援センター
あじさいの家

施設長
打田 浩さん



特集

障がいってなんだろう？

12月には障がいについて考える上で大切な月です。12月3～9日は、障害者週間。そして、障害者の権利に関する条約が国連で採択されたのも、2006年12月でした。そもそも、障がいってなんだろう？誰のこと？知っているようで知らない障がいのこと、一緒に考えてみませんか。

Nothing about us, without us!

「障がい」について、指針となっているのが、2006年にできた障害者の権利に関する条約です。採択までの話し合いの中で、世界盲人連合会長のキキ・ノルドストロームさんの発言に大きな拍手が起こりました。それは、「Nothing about us, without us! (私たち抜きに私たちのことを決めないで!)」というもの。障が

いのある人の思いを表している、大切な考え方です。

日本は2014年1月に条約を締結しました。条約の第19条では、障がいのある人も他の人と同じように地域の中で生活する平等の権利があると明記されています。私たちは、誰もが地域で普通の暮らしができるように、「社会」を変えていく必要があるのです。



地域の祭りに家族と参加する由芽さん。出店や夜の花火鑑賞など、家族みんなでたっぷりと楽しみました

平野 由芽さん

左から智美さん(母)、
由芽さん、瑛貴さん
(弟)、偉格さん(弟)、
和範さん(父)



1. 居住地校交流で参加した員弁西小学校の運動会 2. いなべ公園にある長いローラー滑り台でビューン！ 3. 通っている特別支援学校北勢きらら学園近くの梨園でナシ狩り体験 4. 放課後は放課後等デイサービスへ。ハロウィン目のこの日は、ハロウィンの工作で遊びました 5. 青色の世界にびっくり！



当たり前暮らしを

バギーに乗った由芽さんと、祭りや公園などいろんな場所にお出かけする平野さん一家。
「当たり前に家族のお出かけを大切にしている」という由芽さんの両親に話を聞きました。

懸命な姿に胸を張る

「日本語じゃないと思った」
母の智美さんは、由芽さんの病気を説明する医師の言葉が外国語のように思えたそうです。
由芽さんの10カ月検診の時、大きい病院を勧められ、「あくまで念のため」と考えて県立総合医療センターへ。検査後、医師から指定難病のウェスト症候群と告げられました。
入退院を繰り返す中で、同じような境遇の母親たちと話すように。ざっくばらんに話し合える関係に、助けられていきました。
「由芽はバギーに乗っているのですが、周りの人の興味の対象になることがあります。視線が気になり、外出するのをためらった時

期もありました。でも、今を懸命に生きている姿を見て、隠す必要はない、『堂々として！』と思うようになりました」
由芽ちゃんの姿を見て
地域の子たちに由芽さんの存在を知ってほしい、との思いから、毎年、地域の小学校への居住地校交流^{*}に参加してきました。参加すると、子どもたちが由芽さんの周りに集まって、交代でバギーを押してくれたことも。
「同じ学校に通っていないくても、地域の中に同級生がいることを見て知ってほしい。何かあったとき、『由芽ちゃん、大丈夫かな？』と気にかけてくれる子が、地域にいてほしいと思います」

いろんなチャレンジを

親子料理講座に参加した時、講師が由芽さんにできることを考えてくれて、試食係を担当することに。当たり前を受け入れてくれたことで、親子の楽しい思い出になりました。
「『できる』かどうかは、やってみないと分かりません。最初から、『できないだろう』と決めつけなくて、まずは挑戦させてほしいです」
いろんなことにチャレンジさせてあげたいし、家族一緒にお出かけもしたいと両親は語ります。
父の和範さんは「でも、それは他の人と同じで、親として当たり前の気持ちです。特別視せずに、普通に接してくれるとうれしいです」と話してくれました。

楽しいお出かけのために

三重おもいやり駐車場利用証制度

障がいのある人、妊娠婦、けがをした人などで、歩くことが困難な人の外出を支援するために、県内の公共施設や商業施設などに「おもいやり駐車場」が設置されています。
「入口に近いから」などの理由で利用証を持っていない人が車をとめると、本来利用すべき人が駐車できません。一人一人が適正な利用を心がけましょう。
おもいやり駐車場利用証の交付申請は人権福祉課へ。

☎ 人権福祉課 ☎ 86-7815



由芽さんが利用している放課後等デイサービスオハナの小林さんに、運営に込めた思いを聞きました

選択肢が広がるように



放課後等デイサービスオハナ
代表
小林 恵理さん

2017年に設立した放課後等デイサービスオハナでは、常に母親目線を大切にしながら運営しています。例えば、きょうだいの運動会がある日は、朝早くから利用してもらうなど柔軟に対応。それは、「障がいのいる子がいるため、できないことがある」と考えてほしくないから。放課後等デイサービスを利用して、選択肢が広がったと思ってほしいです。
私自身、障がいのある長男を出産したとき、受け入れるまでに時間がかかりました。主治医の勧めもあり、1歳のときに地域の保育園に入園。この経験から、「母子分離は大切」と思うようになりました。
母親も一人の時間を持ちたいし、仕事もしたいと思います。責任感の強い人だと、障がいのある子を預けるのをためらうかもしれませんが、一人で抱え込まないで。利用できるものがあったら何でも利用してみしてほしいです。
今、一番考えるのは将来のことです。長男の存在がきょうだいの重荷になってほしくありません。職員や看護師不足などの課題はありますが、いろんな道を考えていきたいです。

^{*}居住地校交流・・・特別支援学校に通う児童や生徒が、地域の小中学校に行き、一緒に学習や行事に取り組むこと



今年、アート作家として第一歩を踏んだ山下朔矢さんと、「アートと福祉」をテーマに活動している地域おこし協力隊の金子文絵さんに話を聞きました。



桐林館に展示している自身の作品を持つ朔矢さんと、「朔矢さんのアートだから飾りたい」と話す金子さん



アート作家

山下 朔矢さん

赤、黄、緑にオレンジ——。大胆で鮮やかな色使いの貼り絵は、市内に住む作家、山下朔矢さんの作品です。クレヨンや水性ペンで力いっぱい塗った画用紙を切り分け、パーツのようにして、一枚ずつ慎重に別の画用紙に貼り付けて作品に仕上げていきます。

朔矢さんは現在、くわな特別支援学校高等部2年生。中学部の担任が美術の教員だったことがきっかけで、創作を始めるようになり、今年7月には、北勢町阿下喜

の桐林館喫茶室で自身初の作品展を開催しました。

母の友美さんは「夏休みだったこともあり、多くの友人が作品展を見に来てくれました。新聞に取り上げられるなど反響が大きくて驚きました」と話します。

朔矢さんは、2歳の時に自閉スペクトラム症と診断されました。「私たち家族は彼に、のめり込むほど好きなことが見つかるといいな、と考えていました。何に興味があり、何が好きなかを、ずっと観察してきました。やっとアートに巡り合えた、という思いがします」と友美さん。創作を強要したことはなく、朔矢さんの「描くの好き！」という気持ちを家族で大切にしています。

父の裕右さんは「桐林館喫茶室のような、いくつになっても集うことができる地域の居場所があることがうれしい」と話します。

朔矢さんのあふれるほどの「好き！」な気持ちが、作品を見る者を明るい気分にさせてくれます。

音声オフの世界では、聞こえないことが「障がい」ではない

福祉は面白い

桐林館喫茶室筆談カフェは、音声を使わないコミュニケーションを楽しむ空間として、2020年8月にオープンしました。コミュニケーションは、手話や筆談、ジェスチャーで行います。

筆談カフェを運営する金子文絵さんは「訪れた人は、無意識のうちに固まった障がいに対する価値観がガラッと変わる体験をします。体験することで、自分ごとに落とし込んでほしい」と話します。

医療、教育、福祉の仕事を経験してきた金子さん。自身の経験から、医療や福祉はその分野の中にいる人とその外の人との間に隔たりがあると感じてきました。

「暮らしの中で福祉の分野と関わる機会がないので、よく分からない。分からないから、ネガティブなイメージを持ってしまう。筆談カフェで、構えずに福祉に触れることで、おもしろさに変わるのでは。ここは、一般の人と福祉を『ゆるく』つなげる場と言えます。」

アートと福祉

店内に飾られたアート作品は、障がいのある作家のものです。そこには金子さんのこだわりがあります。

「障がいのある作家の作品だから展示している訳ではありません。この人の作品だから飾りたい!」と思えるかどうか大切です。朔矢さんの作品も、一カ所だけ、色が違います。きっとそこには、彼の物語があるはず。作品を語るとき、障がい名や病名ではなく、本人や家族に物語がないと見る人の感動を引き起こせません。そういう作品に出会っていきたいです」

良い「問い」を持っていたい

「障がいって何だろう?と考えると、それそのものが障がいではなく、社会に出たときに障がいが生まれていると気付きます。社会の中で生じた障がいも、工夫一つでみんなが楽しむことができることを知ってほしい。例えば、英語を話せないという『障がい』も、字幕が付くことで障がいが消えていくように。互いが歩み寄れば、障がいなんて無くなるのでは。筆談カフェの体験が、これってどういうことだろう?と『問い』を持つきっかけになれば」と金子さんは話します。

社会を変えることは、一番身近な「自分」の価値観を変えること。筆談カフェの体験から見えてきました。

地域おこし協力隊

金子 文絵さん



桐林館喫茶室 筆談カフェ

住所：北勢町阿下喜 1980 桐林館内
営業：木～日曜日 13:00～16:00

予約優先。

予約の連絡は公式 LINE から▶



1. 「書くことが新鮮でした」と話す愛知県から来た2人組 2. 室内は音声オフ 3. ノートには楽しそうな筆談のあとが記されています



理解し合い 話し合う

障がいのあるなしに関わらず、生き生きと安心して暮らせる社会が求められますが、今の社会の中には、障がいのある人にとっての困りごとや障壁がまだまだ存在します。障壁をなくして、誰もが力を発揮できるには、「理解」と「対話」が必要です。

社会の中にある障壁とは？

私たちの生活の中にあるものは、障がいのない人を基準に作られているものが多くあります。障がいのない人にとって障壁と感じられなくても、障がいのある人にとっては生活のしづらさを感じる障壁となります。



合理的配慮ってなに？

障がいのある人もない人も同じようにできる状況を整えるために、負担が大きすぎない範囲で、その人に生じている障壁を取り除くため、配慮することです。

障がいにはさまざまな種類があり、程度や症状に個人差があります。障がいへの理解を深め、障がいのある人の意思を尊重しながら、どんな合理的配慮が必要か、対話をしながら決めていくことが大切です。

昨年6月の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の改正で、民間事業者にも、国・地方公共団体と同様に、「合理的配慮の提供をしなければならない」とされました。法整備が進められたことで、合理的配慮が社会の中で、ますます広まっていきます。

聞くことが困難な場合



メモを取るなどして情報提供をする

指示の理解が困難な場合



写真や絵文字、ジェスチャーを用いて説明する

読むことが困難な場合



読み上げて伝えたり、音声読み上げソフトを用いて伝える

段差の移動が困難な場合



段差にスロープを渡す

図書館で深める理解



「みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし」

湯浅正太作
石井聖岳絵
日本図書センター

「おとうと」はかわいくていとおいしい、でもときどきちょっとはずかしい。障がいのあるきょうだいを持つ子に伝えたいメッセージから誕生した絵本。



「障がいのある子とその親のための「親亡きあと」対策」

鹿野佐代子著
翔泳社

成人した障がいある人の暮らしや、「親亡きあと」の相談を受ける著者が、お金や暮らしにまつわる本当に必要な備えについて事例を交えて詳しく紹介。



「ユニバーサルデザインでみんなが過ごしやすい町へ (全3巻)」

白坂洋一監修
汐文社

交通機関、公共施設、ショッピングセンターなど、町にあるユニバーサルデザインを探しに行こう！働いている人へのインタビューと共に紹介。

当たり前に関係づくりを



いなべ市社協相談支援事業所
☎ 72-5130

相談支援専門員

和田 晶博さん

気軽に相談してほしい

相談支援専門員として、障がいのある人が必要な制度を活用できるように支援しています。サービスをコーディネートするという気持ちではなく、目の前にいる人との1対1の関係作りを大切にしています。

「鬱^{うつ}になり退職したが、体調の許す範囲で働きたい」「引きこもっている子がいる」など、どこに相談すればいいかわからない人もいます。市内に4つの相談支援事業所があるので、気軽に相談してください。

理解が広まっていくように

本人も地域との関わりを望んでいると感じます。外出したいという要望も、ヘルパーを使ったサービスを受けることもできますが、ボランティアの力を借りて本人の行動を広げることも大切です。触れ合う人が増えることで、障がいに対して理解が広まっていくのでは。障がいのある人の自立と尊厳を守るには、全ての人が互いに認め合う意識を持つことです。社会福祉協議会にはボランティアセンターがあるので、ぜひ利用してください。

社会福祉協議会ボランティアセンター ☎ 41-2945

本人が持つ力が発揮できるように

発達支援課
☎ 86-7825

藤井 さをりさん



寄り添いながら配慮の方法を探る

発達支援課で関わっている子どもが持つ困りごとを聞き取り、通っている保育園や小中学校と一緒に困りごとへの合理的配慮の方法を考えています。

例えば、学習用具の使用について、スティックのりをテープのりに変更することで、不器用さを持つ子の困りごとが解消することがあります。困りごとを抱える子に対して、どういった配慮が有効か、アイデアと一緒に考えています。必要な配慮の提供が難しい場合、互いに寄り添いながら、一つ一つ合意形成しています。

支援をつなぐバトン

市では、2012年から「ハピネスファイル(いなべ市版相談支援ファイル)」の配布を始めました。就学や就労など、関わる機関が変わる時に一つ一つ説明しなくていいように支援の情報をまとめたものです。支援者が、本人をよりよく理解するためのツールです。関わる人たちが本人を理解し、もともと持っている力を最大限発揮できる環境を整えていきたいです。

topic

朗読ボランティア なよの音 情報を声で伝える



なよの音の皆さん

なよの音は、視覚障がいのある人に向けて、市情報誌 Link と社協だよりを朗読し、CDに録音する活動をしています。CDは、社会福祉協議会を通じて必要な人に配られる他、市内の各図書館に置いてあります。代表の伊藤純代さんは「伝え方に注意しながら朗読しています。多くの人に、朗読CDの存在を知ってもらいたいです」と話します。



録音の様子。アクセントなどが間違っていないか、メンバー同士で確認し合って録音しています。普段は10人で活動しています

誰もが暮らしやすいまちに

「困った！」はすぐそばにある？

社会福祉協議会では、福祉への関心を高め、思いやりとやさしさを養うことを目的に市内の小中学校で福祉教育授業を開いています。

10月24日（月）に山郷小学校の4年生42人が、気付きのワークショップを受けました。高齢者、おなかの大きな人、足をけがしている人などが描かれたまちの絵を見て、「この中に困っている人はいるかな？」「その人は何に困っているのかな？」を考えました。授業の最後に、自分なら何ができるかを発表しました。



「困った！」に気付き、自分にできることを考えてみた



【気付いた！】
図書館で本棚の上の本が取りにくそうな人がいる

【できること】
声をかけて本を取る

高橋 瑠花さん



【気付いた！】
階段を登れずに困っている松葉づえの人がいる

【できること】
松葉づえを持って、体を支える

川瀬 大翔さん



【気付いた！】
車いすでタクシーに乗りにくそうな人がいる

【できること】
車いすを運ぶ

當銘 結菜さん



【気付いた！】
一人だけ友達と遊べていない子がいる

【できること】
声をかけて一緒に遊ぶ

伴 徹平さん



【気付いた！】
文字が読めずに困っている人がいる

【できること】
読み上げて伝える

水谷 柚菜さん



【気付いた！】
車いすで建物の中に入れないう人がいる

【できること】
入れるように車いすを運ぶ

渡邊 希さん

想像力を持って、できることから始めよう

社会福祉協議会 地域福祉課 小川 智也さん 山内 美香さん

思いやりの視点を持つと、さまざまな手助けを必要としている人がいることに気が付きます。少しの手助けがあれば、誰もが幸せに暮らすことができる。「何に困っているのかな」と想像し、自分にできる手助けから始めてみるのが大切です。



福祉教育授業で「気付き」を学ぶ子どもたちと、桑員バリアフリーの会の伊藤芳和さんを紹介します。誰かの「困った」に気付き、自分にできることで助け合う。共に生きるためのヒントが見えてきました。

「誰か」が暮らしやすいは、「誰もが」暮らしやすい

人に会うために外に出よう

28年前、32歳のときに多発性硬化症になり、41歳から車いすを利用しています。当時は、病気を受け止めきれずに落ち込みました。そんな時、同じ病気の患者会や桑員バリアフリーの会の人たちと会って、気持ちが救われました。私は人とのつながりで救われたので、他の人にも地域の人とのつながりを大切にしたいです。

思いやりとやさしさ

自分の経験を生かし、依頼があれば学校や企業へ出向いてユニバーサルデザイン（UD）の講習を行っています。講習では、「目が見えない子がクラスにいたら、どうする？」と質問し、考えてもらいます。「誰かが小さな声で読めば授業に参加できるね」と、誰かの助けがあれば、みんなと同じことができることを伝えています。

UDを簡単に表すと「思いやりとやさしさ」と言えます。思いやりとやさしさを持って、「自分な

ら何ができるかな？」と考えることが大切なのです。

ほんの少しの勇気

UDとは、障がいのある人だけのものではありません。私たちの周りには、何かしらの「困りごと」を抱えている人たちがいます。それは、見た目では分からないかもしれません。相手の立場になって考えて声をかけ合えば、誰もが暮らしやすいまちになります。

見知らぬ人に声をかけることは恥ずかしいと思いますが、少しの勇気を持って声をかけてみてください。みんなで協力し合って、暮らしやすいまちを作りましょう。

ユニバーサルデザイン

年齢や障がいの有無に関わらず、誰もが使えるように最初からデザインすること。例えば、シャンプー容器のギザギザはリンスと区別するためのもの。



桑員バリアフリーの会
伊藤 芳和さん



ユニバーサルデザイン講習の様子

voice

ヘルプマーク

外からは分かりにくい不安を抱えている



平野 もと子さん

8年前に右人工股関節置換手術を受けました。子どもからヘルプマークのことを教えてもらい、手術をした年から持っています。普段から、ヘルプマークをリュックサックに付けています。元気に見えるかもしれませんが、荷物を持っているときや下り階段などが不安です。ヘルプマークを付けていると、安心感があるので、外出時の行動範囲が広がりました。もっと多くの人に知ってもらいたいです。



ヘルプマーク
援助や配慮を必要としていることを周囲に知らせることができるマーク



配布窓口 人権福祉課
☎ 86-7815

これからも、このまちで。

この先も安心して暮らせるまちになるように。

1 ずっと友達だよ

「あ！稟唯ちゃんや！」「稟唯ちゃん」

9月22日（木）、普段、くわな特別支援学校に通っている日紫喜稟唯さんが、居住地校交流で員弁中学校にやってきました。

久しぶりに会う同級生に声をかけられ、一緒に体育と美術の授業を受けました。母の香さんは居住地校交流に参加した思いを「近所で会ったら、声をかける関係が続いたらうれしいです」と話してくれました。

稟唯さんが授業を終えて帰る時、見送りに出てきた生徒は、「稟唯ちゃんに会えてうれしかった」と話していました。



美術の授業を一緒に受ける様子

2 仲間と一緒に

今年4月に旧三里保育園の跡地に完成したグループホーム「バンブーハウス」では、テレビを見たり、夕飯ができるのを今か今かと眺めたり、それぞれの時間を過ごす姿がありました。ここでは、障がいのある人が必要なサポートを受けながら、親元を離れ、仲間と共に地域で暮らしています。定員は10人で、夜間は2人の支援員が常駐します。

支援員の岡洋章さんは「入居から半年が経って、生活リズムにも少しずつ慣れてきたようです」と話していました。

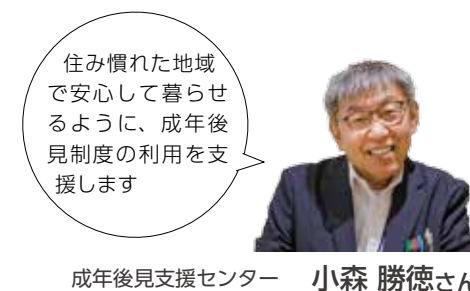


リビングルームでくつろぐ様子

3 不安から安心へ

知的障がい、認知症などにより、一人で決めることに不安や心配のある人などの権利や財産を守り、本人の意思を尊重した生活が送れるように契約や手続きの支援をする成年後見制度があります。この制度の専門窓口が今年開所しました。

平日 8:40 ~ 17:15 市役所 1 階 **T 86-7817**



成年後見支援センター 小森 勝徳さん

相談機関

障害手帳や障がい福祉全般について
問 社会福祉課 T 86-7816 F 86-7865

発達障がいについて
問 発達支援課 T 86-7825 F 86-7864

障がいを理由とする差別について
問 社会福祉課 T 86-7816 F 86-7865

障がい者虐待について
問 市障害者虐待防止センター T 86-7816 F 86-7865

障がい福祉サービス利用援助について（4事業所）
問 アイリス相談支援センター T 72-7722 F 72-7744
問 アジサイ T 72-2618 F 72-2618
問 いなべ市社協相談支援事業所 T 72-5130 F 72-3147
問 いなべ市大安障害者活動支援センター T 88-0612 F 78-3265

障がい福祉全般について
問 障がい者総合相談支援センターそういん
いなべ・東員分室 T 49-5315 F 49-5316



触れ合って わかったこと

あじさいの家のなかまと関わって7年目。うそのない、感情をそのまま出す彼らと関わるうちに、自分の心も素直になっていきました。当初の「何かしてあげよう」という考えが、「なかまと一緒にしよう」へと変わりました。

あじさいの家
スタッフ
高木 正さん



生まれたことを、ずっと、祝福し合いたい

あじさいの家「お誕生日会」



1. くす玉割り 2.3. みんなウキウキ 4.9. なかまが大好きなアミアンの誕生日ケーキ 5.6. 誕生年のヒット曲を演奏 7.8. 職員となかまが一緒に楽しむ

知って、話して、触れ合って――

取材を重ねる中で、あじさいの家で毎月開催されるお誕生日会に出席。くす玉が割られた時、自然と口から「お誕生日おめでとう！」と出ました。「障がいのある人」というフィルターが取れて、1対1の人間関係のスタートを感じる瞬間でした。

障がいのある人となない人の関係は、支援を受ける・支援をする、という一方向な関係ではありません。実際に触れ合うと、目の前の一個人と人間関係を築くだ

け、という当たり前のことに気付かされます。

相手を知り、話をしてみても、触れ合いを持つうちに、障がいってなんだろう？の答えが見えてきます。自分の認識が変わると、人との関わり方も変わります。そんな人が増えると、まちが変わり、社会も変わります。

誰もが地域で普通の暮らしができる「社会」を作るのは、私たち一人一人の「当たり前」の触れ合いからスタートするのです。